

学長賞

「桐島、部活やめるってよ」

朝井リョウ(集英社)

PR学科 国島里佳

これほどリアルに高校生活を表した青春小説があったらどうか。学校社会における階級、スクールカースト。上位ならラッキー、下位ならアンラッキー。これは学校生活を送る上で、避けては通れない現実だ。

物語は、男子バレーボール部の部長・桐島が突然部活を辞めたことから始まる。些細な出来事から入った亀裂は大きくなり、全体に広がっていく。桐島の友人も、桐島と直接かわりの無かった生徒も巻き込んで。一見つながりのないように見えて、気付かないところで実はつながっている。関係のないようなことが、実は重要だったりする。スクールカースト上位の生徒は上位であるが故の悩み、下位の生徒は下位であるがゆえに悩む。

高校生は、大人にも子どもにも属さない微妙な時期だ。目前には、大人への門が開いており、背後には子どもへ通じていた門が閉まろうとしている。日々に不安や不満を抱えつつ、過ぎゆく日々を惜しむかのように友人たちと笑いながら過ごしている。ひとりになりたくないから、今いる場所を守るために、うわべだけの関係だと感じながらも笑っている。単純そうに見えて複雑で、丈夫そうに感じてもらう関係。

些細な出来事がきっかけで、関係は大きく変化する。大人にも、子どもにも分からない、さまざまなことを考えながら生活している。それぞれが、自ら答えを見つけ、行動していく。

自分の高校時代に重ねながら読み進めていくと、ほんの少し昔の出来事なのに忘れてしまっていた青く、苦い気持ちが思い出された。読み終わるとどこかすがすがしい晴れやかな気持ちになった。この小説を読めば、いつでも高校時代に戻れる気がした。

この小説の何が面白いのか、理解できない人もいるだろう。また、リアルすぎて胸が痛くなる人もいるだろう。前者は、沙奈や梨紗のような、後者は、桐島や宏樹、涼也のような高校生活を送っていたのではないだろうか。どちらにも平等に高校生活は存在している。